

会報

## 白亜の会

青山学院大学卒業生教職員校友白亜の会

二〇二二年 四月 一日 発行

## 心に太陽をもて

二〇二一年度総会挨拶

校友白亜の会 会長 山口菜穂子

こんにちは。白亜の会会長の山口菜穂子でございます。本日の総会へのご参加、お礼を申し上げます。また、本日はご多用の中、青山学院大学教職課程課主任 教育人間科学部教授 平賀伸夫先生 教職課程課長山崎順子様にご参加くださっております。ありがとうございます。



例年白亜の会の総会・懇親会は二月の第一土曜日に開催しております。

に開催しております。昨年度は、コロナ禍に合って、紙面総会とし、今年度はオンラインでの総会となり、懇親会は大変残念ですが、中止とさせていただきます。本日の総会へのご参加、改めまして、お礼を申し上げます。また、

対面指導がなかなかできないという苦しい状況での今年度の活動ではありましたが、六六％合格率を上げられました。改めまして、講師の皆様にご感謝いたします。ありがとうございます。

さて、本日は二〇二二年二月二六日。思い出します。二年前の二月二七日の夕方のニュースで当時の安部首相が「三月より臨時休業を要請します。」と話した時のことを。ちょうど二年たつのですね。このコロナの影響が様々なところで現れてきています。

最も心配なのは子どもたちを取り巻く環境の変化とその影響です。先日ある教育雑誌に、全国青少年相談研究会において、大阪府立大学学長補佐の山野則子教授の基調講演「見えない子どもの課題とその方策」コロナ禍における子どもの影響調査、子どもの貧困調査を踏まえて」が掲載されていました。調査結果より負担が増えたと答えた母親は二五％四人に一人。子どもは、特にストレスを感じていないと答えた割合は一三・二％。残りの九割近くが何らかのストレスを感じている状態で「衝撃的な結果」としていました。

さらに、相談件数は緊急事態宣言中 学校再開後現在と比較すると、学校再開後に突出して多い一方で、学校を閉じてはならないと。そして、保護者の孤立や貧困が児童虐待の原因になりやすく、子どもの問題行動、低学力の原因になると、その貧困の連鎖、因果関係のサイクルを示しました。このようなサイクルに当てはまる子どもをキャッチできるのは、すべての子どもが通う学校しかない指摘。学校が対策のプラットフォームになり得るとしました。

長くなりましたが、コロナ感染症は病気として人間の体を蝕むだけでなく、子どもの心身に与えている影響の大きさは皆様も実感されていることと思います。私たちにできることは何なのか、改めて考えました。子どもの気持ちを、状況をキャッチできる教員の育成をお手伝いすること。現場にいる先生方には、先生方が子どもたちの元気の源でいられるようお願いしたいと思います。

ここで、山本有三の翻訳詩の一節を読みます。

心に太陽をもて

嵐が吹こうと、ふぶきが こようと、

天には黒雲、地には争いが絶えなかつと、

いつも、心に太陽をもて

希望をもって、白亜の会は、来年度も できる限りの講座を開いていきます。どうぞ、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

## 本号特集の大熊雅士先生紹介

青学卒業後世田谷区の小学校に赴任された大熊氏は、まず特別活動を専門に研究します。その上に教育相談の研究を重ね、これがその後の、指導主事、大学教授、カウンセリングセンター室長などの働きにつながったのでしよう。特に東日本大震災後は、被災した子供の心のケアのために「みどりの東北元気キャンプ」に取組み、大学教授、臨床心理士らと共に献身的な働きを続けられました。

## 《開講式講話》

二〇二二年五月二五日 の第一回全体会にて

## 「今、教師に求められる力」

小金井市教育委員会

教育長 大熊 雅士

みなさんこんにちは。ただ今ご紹介いただきましたが、青山学院大学を卒業以来いろいろなことをして、今小金井市の教育長をしています。学芸大学の時には、子供を木に登らせたり、ツリーハウスを造ったり、祭りで神輿をかついだり、マイナス十五度の所で雪像を造って子供たちを泊ませたりしました。この写真は、会津で福島被災した子供たちのためのキャンプをしたときのものです。

今日は、大きく三つのお話をしたいと思います。



〔1〕 潮目が変わった  
〔2〕 新しい教育を推進するために五つの視点  
〔3〕 気になった言葉の発表 最後に皆さんが気になった言葉を発表してもらいたいと思います。聴きなから、すべての言葉が皆さんにとって新しい言葉だと思

【略歴】青山学院大学教育学科卒業、都公立小学校教諭、東京都教育相談所、小金井市指導主事、江戸川区指導主事、都教職員研修センター指導主事、葛飾区立小学校副校長、学大付属世田谷小学校教諭、学大教職大学院特命教授、カウンセリング研修センター学舎「ブレイブ」室長、小金井市教育長

うので、話の中で気になった言葉を記録に残しておくといひかなと思います。

## 〔1〕 潮目が変わった

1. 地球環境の変化・社会構造の変化・生活環境の変化にたくましく生きる

先ほども話があったように、最近では地球環境の変化、社会構造の変化、新型コロナウイルス感染症など生活環境の変化など「先行き不透明で予測困難な時代」になっていると言われていきます。しかし、果たして「これ本当ですか？」なぜそんなことを言うかという、新型コロナウイルスは初めてではないんですね。世界の歴史を紐解くと過去にもこのようなことがあったんですね。そういう意味では「すべて想定内の事」です。

・少子化が改善されなければ、超高齢社会はいずれ訪れる。

・今、二酸化炭素排出を制限しなければ、いずれ東



京の夏は45度を超える。

・コロナなどの感染も、歴史を紐解けば、実は100年ごとに訪れている。

・20年後には、54%の職業がなくなる。

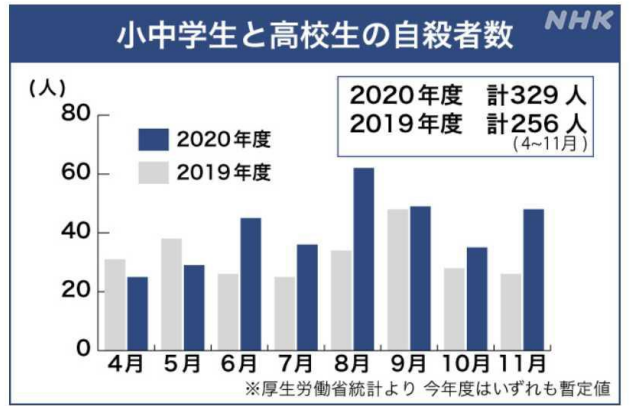
といいますが、今でも職業はどんどんなくなっている。だから、予想困難ではなくて、予想すると大変なことになるから予想したくないというのが本音なのではないでしょうか。

でも、われわれ教員は、そういうどんどん変わっていく世の中にたくましく生きる子供たちを育てなければならぬ。この現実を目をそらしてはいけません。

## 2. データから読み解く最近の子供の課題

そして、僕自身はもっと重大なことから目を背けているのではないかと思つてます。不登校の子供が激増しているんです。平成13年をピークに少し落ち着いていましたが、平成25年以降また激増している。何があつたんでしょうか。

また、昨年度から今年にかけて、またすごいことが起きています。グラフを見てください。小中学生と高校生の自殺の数です。二〇二〇年コロナで休校になり、学校が始まった六月以降、毎月前



話をしたいと思います。

(1) 孤立化が進んでいる

誰も僕のつらさを分かってくれる人はいない。孤立化が進んでいるということをもっと大きな問題として取り上げる必要があると思います。どんな風に子供たちが変わってきているのか。

スマホが発売されて14年(新) デジタルネイティブの子供たちの様子を観察すると下図のような特徴が見られます。私の息子と孫の世代を見てもはっきり違う。息子たちはよくチャンネル争いをしていました。しかし、孫はチャンネル争いという言葉すら知りません。なぜかという、すべての番組が録画されていて、後で見ればいい。家の中に複数のテレビがある。そうなったら喧嘩しなくていいわけですか。

年の同月の自殺者数を越えているんです。これは大変なことです。なぜこんなことが起きるのでしょうか。この理由を説明すると一時間二時間かかってしまうので、一つだけこの原因について

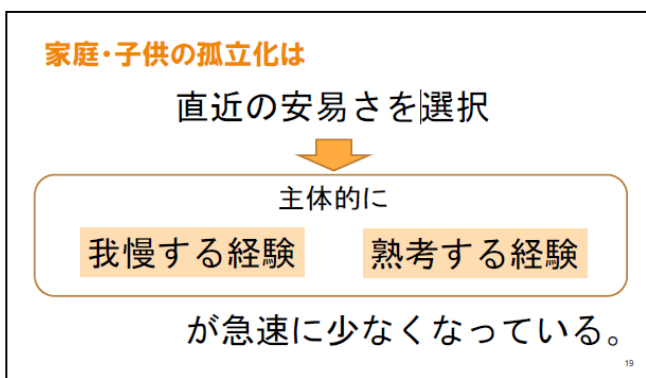


な子供たちに本当に学びたいんだという意欲をもた

よね。そうすると子供たちにとって経験として何がいちばん欠けるかというと、我慢することです。我慢する経験が十年前からものすごく減っている。そうなったときに大きく変わったのが、小学生のなりたい職業です。ゲームプログラマーやユーチューバーが上位を占めています。この五年・十年間で子供たちは大きく変わったものです。この五年・十年間で子供たちは大きく変わった。学校はそういう子供たちの面倒を見るということです。

もう一つ大きな問題があります。皆さんも経験した人が多いと思いますが、個別指導塾が全体の50%を超えているんです。子供たちは手を挙げれば担当の先生さんが来て教えてくれる。分からなかったら、ウイキ先生や動画配信サービスを見ればいい。どうということかという、子供たちは自分で考えなくてもあつという間に教えてくれるという状況が整っているということです。学校で分からなかったら塾で教えてもらえばいい。考えようとしていない子供が激増しているんです。そんな

経験として何がいちばん欠けるかというと、我慢することです。我慢する経験が十年前からものすごく減っている。そうなったときに大きく変わったのが、小学生のなりたい職業です。ゲームプログラマーやユーチューバーが上位を占めています。この五年・十年間で子供たちは大きく変わったものです。この五年・十年間で子供たちは大きく変わった。学校はそういう子供たちの面倒を見るということです。



みんな高い壁を協働で登るような経験をさせる学校を創っていかねばならないということです。小さな問題を解くということではなく、「みんなで力を合わせなければ登れなかったよ」という経験を学校でさせてあげることです。今子供たちが経験していることは、スロープばかりでスロープで登る経験しかしていない子供が多い。分からなければ聞けばいい。自分の頭を使おうとしないんです。これは大変なことです。スロープで登ったとしても達成感を感じられないからです。達成感を感じられないと

せるのは簡単ではないということです。そんな子供たちに興味をもたせるような授業を展開する必要があります。ということ。まとめると、家庭・子供の孤立化(スマホやさまざまな社会の変化)は、直近の安易な選択肢を選択し、我慢する経験や熟考する経験が急速に少なくなっている。ですから、学校はその反対に、みんなであつと我慢して、熟考して、ものすごい大きなことを成し遂げるような経験のできる学校をみんなが創っていかねばならないということです。それは、

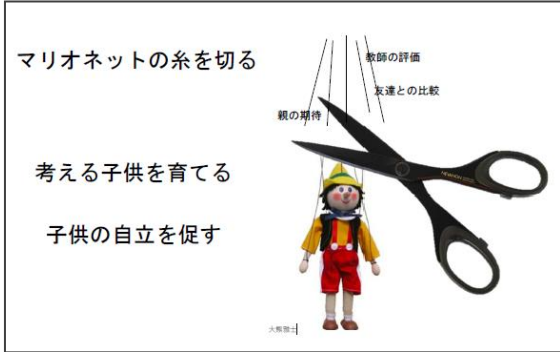
せるのは簡単ではないということです。そんな子供たちに興味をもたせるような授業を展開する必要があります。ということ。まとめると、家庭・子供の孤立化(スマホやさまざまな社会の変化)は、直近の安易な選択肢を選択し、我慢する経験や熟考する経験が急速に少なくなっている。ですから、学校はその反対に、みんなであつと我慢して、熟考して、ものすごい大きなことを成し遂げるような経験のできる学校をみんなが創っていかねばならないということです。それは、

いうことは、自分のよさが感じられないということです。自分の中にすごい力があるということをお子供たちが実感できないということです。それは自己肯定感が高まらないことにつながります。

(2) 潮目が変わり予測困難な時代に

まさに潮目が変わったということです。「潮目が変わった」というのは、魚釣りの船頭さんが言うのですが、海流の流れが変わっても魚が獲れなくなっただけのことです。潮目が変わったら釣る場所を移動したり、釣り方を変えたりしなければならぬことを意味するのです。同じように、この五年間で子供たちの生活や環境は大きく変わっているのです。五年前と同じことをしていたのでは、この時代を生きる子供たちの意欲を喚起することはできないのです。

これから、潮目が変わった予測困難な時代になっても子供たちはそのような社会の中で生きていかなければならぬのです。私たち教員には、子供たちがそのような未来を自分らしく生きる力を付けてやるのが現代の教員に求められている能力だということです。今までと同じ教育だけを受けた子供たちは、未来を生きていくことは



できない。ベテランの先生も若手の先生も力を合わせて新しい時代を生きていく力を子供たち一人一人に身に付けさせてあげなければいけない。新しい教育を始める元年ということができると思います。

〔2〕新しい教育を推進するために

五つの視点

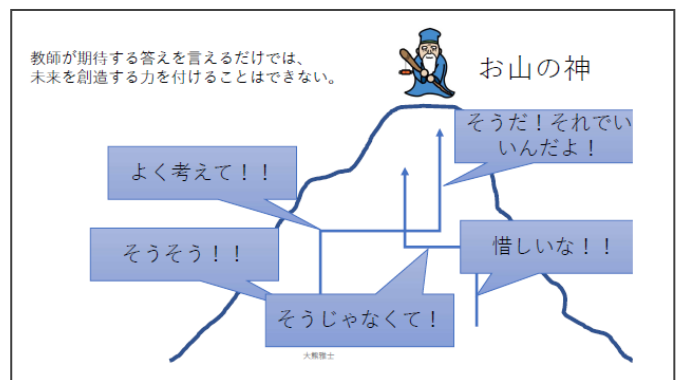
① マリオネットの糸を切れる教師

新しい教育を推進するための五つの視点の第一、「マリオネットの糸を切れる教師」とはどういうことでしょうか。「マリオネットの糸を切る」とは、教師の評価とか友達との比較とか親の期待とかの糸に操られるのではなく、子供自身が頭を使ってしっかり考えられるようになるということです。そして子供の自立を促すということです。教師から「この成績じゃ高校行けないよ」と言われながら、教師の糸に操られていく子供ではだめなんです。子供から自分のよさを生かすためにはどんな進路を歩んだらいいのかということ自分で考えられるような、そういう子供を育てる必要があると思うんです。

《問題の自分事化ができる子供》

それは、まさに自分の目の前の問題を「自分ごと化」しようとする、自分ごと化して考えることができる子供だと思えます。

しかしながら現代の授業に見られる「問題の自分ごと化」の阻害要因があるのです。それはどんなことか。図のように、「お山の神」がいるとします。授



業中に子供が発言すると「そうそう、そうなんだけどなあ...ちよつと違うんだよなあ！」 「そうじゃないんだよ、惜しいなあ」 「そうじゃなくて、そこをよく考えて！」 「そうだ！それでいいんだよ！」 という先生いませんか...これって子供自ら考えていますか。先生が何を期待しているかを想像しているだけで、本当に自分の頭を使っていない。これでは授業とは言えない。こういう先生が多いから子供は考えなくなるんです。

新規採用されたときに、この言葉を覚えておいてほしい。「お山の神だけにはならないようにしよう！」そして、自分の足でしっかり歩める子供を育てようということです。先生の考えている所に到達させるだけではなく、先生をはるかに越えて新しいことを創造できる力を付けなければ、これからの世の中を生きていく子供にはならないはず。もう少し具体的に説明すると、子供の発言がもやもやしてうまく伝えられないときに、先生が「君が言っていることはこういうことかい？」と言って要

点をまとめてあげることがあります。これも一つの方法ですが、これをやっていると子供の発言がどんどんシヨボくなります。どうせ先生が要点をまとめてくれると思うからシヨボくなるのです。絶対にやってはいけない。また、子供の発言がちょっと期待する答えにかぶっていた場合「君の発言はこうだよ」といきなり先生の考えに寄せてしまう（誘導確認）。発言した子はどう思うでしょうね。「あれ？俺の考えまちがっていたのかな？本当はそう思っていないかったけど、先生が言うから、まあいいか。」と自分で考えなくなる。

学校の授業の在り方そのもので子供は考えなくなるということでは、そうならないためにどうしたらよいでしょう。

「子供の発言をとらえるための教師のといかけ」これを4パターンで考えてみましょう。

《要点確認》「君の言いたいことはこうだね。」

「こういうことを言いたかったのかな？」「はい、そうです。」そういう問いかけも大事でしょう。でも、こればかりやっていては、だめだということですね。だから次のように工夫します。

《絞り込み確認》子供の言っていることの一部だけ取り上げるんですね。「君の言っていることは、これだけでいい？」子供は何と答えると思いますか。「うーん。そうなんです、ちよつと違うんです。」と本当に言いたい核心のことを答えます。「そうか、こういうことを言いたかったんだね。」と、絞り込み確認の後に要点確認をします。そうすれば「お山の神」はもう存在しなくなりますね。他にも考えられ

ます。

《選択確認》子供の発言の中には、2つの事柄が入っている場合があるので、そういうときに先生が「これいいね」と言って先生が選ばないで、「君の発言の中には2つあったけど、どっちが君の気分としてはよいの。ちよつとそこを明確にしてくれない。」こんな言い方です。

《比較確認》これは中学校の先生にはぜひ用意してほしいのですが、子供の発言をふまえて「これまでの発言からすると、あなたの考えは環境重視の考えなの？それとも工業生産を重視したほうがいいと考えるの？…どっち派？」というような言い方ですね。「どっちもあるんですけど…」と言われたらこういうってください。「49対51でどっちが勝っているの？」そういう言い方をすると子供たちは自分の考えを言葉にすることができると思っています。そういう一人一人の考え方を明確にすることで、友だちの考え方との違いを明らかにして、話し合って真実を見極めていく。そんな教師になってほしいんです。

皆さんにはすぐできないと思いますが、僕の得意技は子供が言っているのと全然ちがって、ボケて答えを言うんです。「君の言っていることはこういうことなの？」「先生ぼけてるんじゃない。ぼくはそんなことは全然いつてないから…、もう一回よく聞いてくださいいね。」と…。わざとやるんですけどね。他の子供がよく理解できていなくて、でも重要な意見のときは、「ごめん、せんせい、君の言っていることがよく分からなかったんだけど、もう一度言ってくれませんか？」というのと同じで、（そればかりやっていると

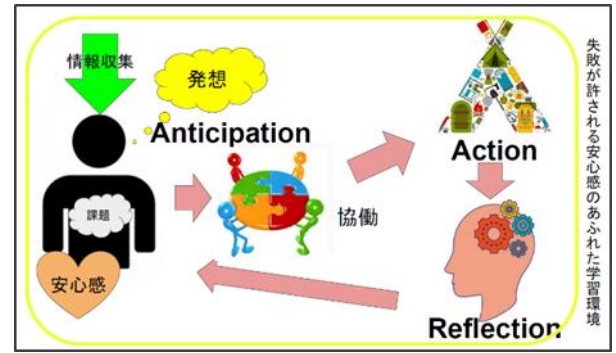
「先生よく聞いてください。」って言われちゃうので…、教師は受け止めることができても、周りの子供が受け止められないときは、こんな対応も必要かなと思います。超高度ですが。

## ② AARをサポートし実践できる教師

「AAR」この言葉を知っている人はどれくらいいますか。いと嬉しいのですが。

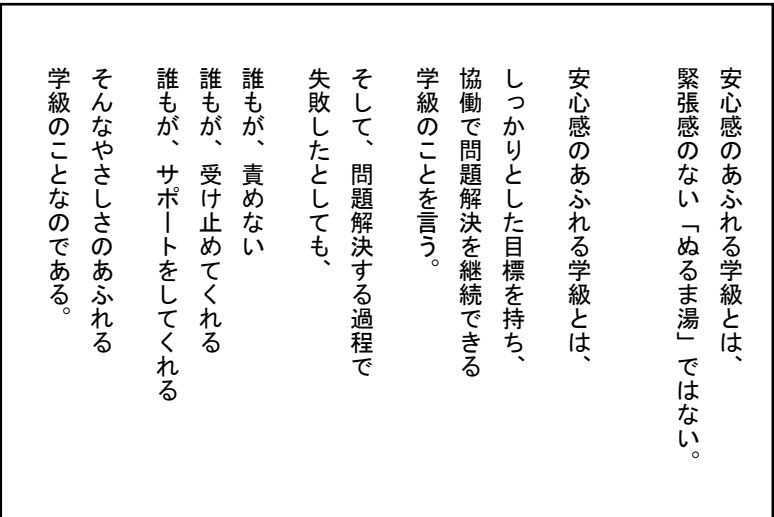
今話したように「自ら考える力をつける」ということは僕が言っているだけではないんです。OECD（経済協力開発機構）の「**OECD FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS 2030**」というところに、これからの子供たちに身に着けたい力はこれであると書いてあるのです。「子供一人一人の『**AGENCY**』の育成」**AGENCY**とは、1 新たな価値を創造する力、2 責任をとる力、3 緊張関係やジレンマを調整する力です。これを文部科学省はどう理解しているかというところ、「様々な課題に対して当事者意識をもって、創造的に問題解決しようとする子供の育成」と言っているのです。僕が今言ってきたことと同じです。OECDはそこをさらに一歩進めて、**AGENCY**を進めるためには、**AAR**サイクルが必要だよと言っているのです。**AAR**とは、**Anticipation, Action, Reflection**（**A**…先を見通したひらめきを言語化し、計画を立案する。**A**…それを仲間とともに実践する。**R**…活動を振り返り、体験と体験を結び付ける、物事の関連の理解を深める、思考を改善する。）ということです。

下図で説明すると、安心感の（左下ハートマーク）あふれる教室で課題に向き合っていくと、「うーん、これどうしたらいいだろう？」と、一生懸命情報収集すると発想が生まれる。その発想をみんなで考えていきながら、一つの計画を立案する。それが Anticipation



（気づき）です。それを Action にすくにもっていき、それでいいかを検証し、課題を発見し、Action し、Reflection し……。昔、PDCA サイクルと言っていたんですけど、最初に「Plan 計画」があつて、しっかり計画を立てなければならなかったんですけど、これが Anticipation（気づき）でいいわけです。それを回していこうという話です。

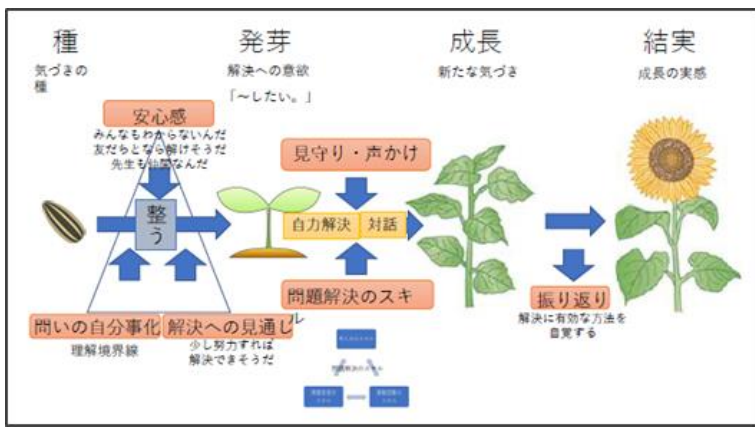
こういう風に進めることが大事なのですが、実践するためには失敗が許される安心感のあふれる学習環境でなければなりません。Action したときに「何であいつ間違っただよ、あいつの言ってることだめじゃねえか。」ということになって、新しい Anticipation が出なくなります。そこで僕は、「安心感のあふれる学級」というのを次のように定義しました。



皆さんの目指す学級と：どうでしょうか。私はこんな風な学級を作ってもらいたいと考えるわけです。③ 子供の意識の流れを踏まえた授業ができる教師

今の授業はどうなっているでしょうか。先生が教えた意図のとおり進む授業ではなくて、子供の意識の流れを踏まえた授業ができるか。それがまさしく、「主体的、対話的で深い学びのある授業」なんです。それを次のような図にしてみました。「主体的」の最たるものは種の発芽ではないでしょうか。種はどういうときに発芽するかというと、ある一定の条

件が必要です。空気と水と温度です。それが揃えば発芽する。発芽したところに日光と肥料が与えられれば成長する。そこに適切に追肥が施されれば素晴らしい花が咲く。こういうことです。これを学習過程になぞらえたのです。



先ほど言った発芽の空気にあたる部分は「安心感」です。学校の空気が安心感にあふれている。失敗したとしても許される。そこに温度「少し努力すれば解決できそう」という解決への見通し、「そして水「問いの自分事化」ができる。「発芽」する。そこに日光「先

生のまなざし、見守り・声かけ」があると成長していく。もう一つは肥料「これまで培った問題解決のスキル等」でどんどん「成長」していく。そして最後に振り返り、ここが大事ですが、「あなたはこういう風な順番で考えてきたか、だれとだれと話し合ってきたか、どういう学習過程ふむことができたから今回全部ができあがったかということ振り返るわ

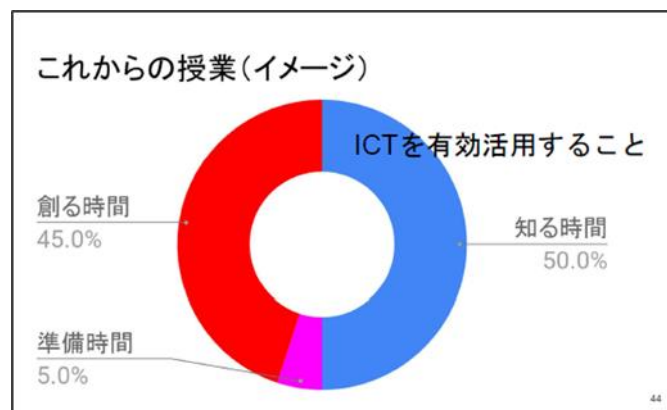
けです。これがまさに「結実」です。結実をするということは種ができることです。振り返りにより学びを振り返って、どういう風にしたからこの問題が解決できたのかということをしつかり振り返って、「こうやればいい」ということをしつかり子供たちに定着させたら、その種はまた次の花を咲かせることができるのです。

即ち「主体的」というのは、何が必要かというのと、安心感と問いの自分事化、解決の見通し、「対話的」は、先生と子供との対話、子供同士の対話、ただ単に対話をするだけじゃなくて、どういう風に話し合ったらよいか対話のスキルも身に付けるといことが大事でしょう。最後の「深い学び」は振り返りをしつかりすること、これが「先生の流れではなく、子供の意識の流れを重視した学習展開」ということができると思います。

#### ④ ICTを活用し、学びの効率化を図り、体験活動を充実させることができる教師

これは、小金井市教育委員会のホームページのIGAスクール構想の動画で、僕が全市民に対して説明しているので、それを見ていただきたいのですが、簡単に説明します。「小金井IGAスクール構想」というのは、今度コンピュータを活用して、この「遠隔授業」、「協働学習」、「個別最適な学び」の三つをやっつけていこうと考えています。その一部を説明しますが、ICTを活用するというのはどうしてかというところ、これまでの授業は、知る時間と準備の

時間と創造する時間があったって、割合としてはこのぐらいだったのではないかと思います。知る時間が65%、準備の時間が15%、創る時間20%。この準備の時間を待ってたりする時間ですね。ICTを活用したら、図のように、知る時間が50%、準備の時間が5%、創る時間45%のようになることを期待して



いるのです。ICTを活用したら紙を配らなくてよい。パソコンを開けてすぐに打ち込んでください。そうすれば全員が見られるようになりますよ、という話ですね。そうなるよ、この「創る時間」即ち自分たちで考えた創ったりする

時間が増えるわけなんです。

ICTは使うことによって、「知る時間」等を効率化し、子供たちがしつかりと体験する時間を増やす、ICTを使うようになることが目的ではなくて、体験学習を増やすことを目的としたICTの有効活用ができるようになったらすごいと思っています。それを具体的に示すと、メダカの卵の観察でま

めをするときに、NHK for schoolの動画を見れば、たった2分間でメダカの成長の様子を振り返ることが出来る。先生はこんな問いかけをします。「メダカの卵の成長する様子を見たけど、自分たちの観察と同じだったかな？ 他の魚はどのように成長するのかな？ カエルは？ 鳥は？ メダカとすべて同じなのか？」この「すべて同じなのか？」という問いかけです。こういう風に問いかけられた子供たちはどうするでしょう。へびは？ ニワトリは？ ペンギンは？ とすぐに調べたくなるでしょう。調べようとしたら、今は一人一台配られているコンピュータですぐ調べられる。「ニワトリは21日」、「エーツ！ペンギンは68日だっけさ！」「あの寒いのに大変だよね！」等とつぶやきが交錯します。それに対してこのメダカは10日で孵化するわけですね。すると他の動物との比較で知識は定着するじゃないですか。

これが目的じゃないんです。こういう風に問いかけをしている先生のクラスの生徒はこんな風になるんじゃないかと思えます。今までの「教える力」から「問う力」が重要になってきて、問う力をしつかり見極めていくと、「子供の探究心に火をつける力」「子供が自ら考えるようになる力」につながります。先生がこのような問いかけを繰り返していくと、子供たちは自ら「問い」を見つけて、自ら問いかけの出来る子供たちを育てていってほしいということです。つまりメダカの観察をして板書を写してノートにまとめる学習時間を自ら課題を見つけて問いかけ、達成感をもって協働して問題解決をする授業をしたときに、自己肯定感を高める時間に変えてい

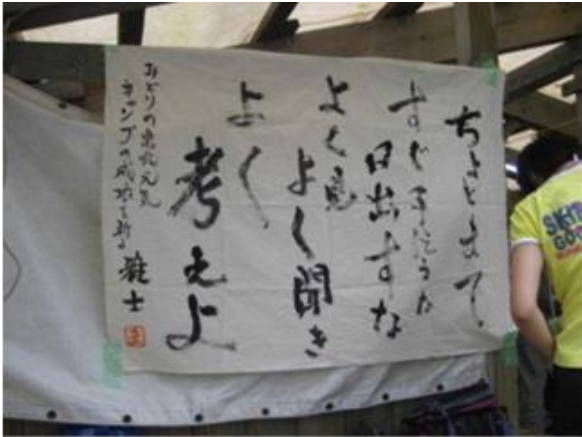
るのではないかと思います。

### ⑤ 3センチの我慢と促しを綱引きができる教師

僕はキャンプをやっているんですけど、下図をご覧ください。これは、後で読んでもらえればよいと思います。僕が大事にしていることです。

「3センチの我慢と促しと綱引き」

ツリークライミングという難題へのチャレンジをどうするか自分で決めさせる。教師のニュートラルなかわりが子供の自己決定を支える。また、シャワークライミング(滝登り)で子供が怪我をしないようにガードはするが、教師は、3センチ手を離して自分の力で登りきる体験をさせる。このような実践のなかで、教師はどういうスタンスをとるかということです。



### ツリークライミング

ツリークライミングは、専用のロープやハーネスを利用して木に登り、自然との一体感を味わう体験活動です。

クマG：ロープでこの木に登ってみたいか？  
 大人A：何言っているの、怖すぎるよ。  
 大人B：無理無理！やめたほうがいいよ。  
 大人C：そんなに簡単ににはできないよ。  
 クマG：どうする？自分で決めるんだよ。  
 子供A：どうしようかなあ？  
 クマG：よく考えて自分で決めればいいよ



「やってみないか」と促すものの、「やめたほうがいい。簡単ではない。」などと声掛けをして、子供がニュートラルに自己決定ができるようにするかかわり方のこと。  
また、途中で登れなくなっても、「頑張れ！」などと声掛けはせず、「よく頑張った。降りておいで。」と声掛けをする。促されて登った子供は2度と挑戦はしないが、降りることを自己決定した子供は、挑戦することをやめない。

### 促しと綱引き



このことを上の写真のような言葉にまとめて、

「ちよつとまで、すぐ手伝うな口出すな。よく見、よく聞き、よく考えよ」と僕は言っています。これで僕の話は終わりです。

この後、一分間で心に残っている言葉をチャットに書いて上げてください。

### シャワークライミング



小さな滝を登るとき子供が足を滑らせてもケガなどしないよガードはするものの支援者が子供を上を押上げたりはしないこと。

子供の体から3センチ手を離すことから、この名前が付いた。子供には見えないこの支援によって、子供は安全に自分の力で滝を登ることになる。その時の達成感は、すべて子供のものとなる。

### 3センチの我慢

シャワークライミングとは、峡谷を下流から上流へ登っていくアクティビティ。山の中を流れゆく冷たい水の中に入って流れ落ちる水を全身で浴びながら滝登りなどを楽しめます。



### 編集後記

子供たちも子供を取り巻く環境も大きく変化しています。教師として、人としての学びの継続はもちろん、自らを変えることに躊躇してはならないということでしょう。愛する子供たちのために、学び合い、互いに支え合い、励まし合う白亜の会でありたいと願っています。(K・U)